

見えないもの

嫉み、悲しみ、怒り、
荒び、諦め

有森信二

見えないものを見る
空の上
大気の渦
海の底
細胞の深奥

見えないものを感じる
蒼空に零れ落ちる涙の一滴
指先に絡みつく微粒子の揺らぎ
大脳辺縁系の震え
檻の内に閉ざされた時の嵩かさ
見えないものを感じる
織りなす情動の寄せ 引き

見えますか

誰彼かまわず抱きつきたくなる性分の
そんな 素のニンゲンの恰好で

なにを見ているのですか
見えていますか
終わった線香花火の飛沫の艶
しなびた夕顔の含羞がんしゆう
蔦葛の叢に紛れ落ちた一葉の
家族 係累 などと呼ばれていたのだった
写真のころ
もしかして
違う領分までもが見える目だって
あるのかもしれませんが
それはそれ
まるで知らない流れの縁に
ゆらりと立っているのかもしれませんが
ニンゲンという

飛びたつ

彼女の眠りではなかった
それが問題であった

飛び立たねばならない
飛び出さねばならない

決まって考え込んでいた
それはひとつのなにかを
どこかへ運びあぐねている
かのようにであった

彼女の焦りは
屋上から

隣の屋上に

そこにはときに
がんじがらめの
縄がかけられていたり

容易くジャンプできると
おっぴらに
明るく宣言したことであった

またときには

舶来ものの化粧が

彼女の眠りは

施されたりしていた

十重二十重に見張られていた
そこが問題であった

彼女は

いつも心臓をやられていた
彼女の眠りは

飛び立たねばならない
飛び出さねばならない

瘡かさのように戦慄せんりつく心臓を抱え

人差指の一本を

失ってしまう前に

主のいない台所

味噌汁をつくる

何年ぶりか

何十年ぶりか

味の何某という粉末を放り込み

馬鈴薯の切り方は適当に

玉葱もほどほどに

刻んだ油揚げも放り込む

しかし味噌がない

肝心の味噌がない

主のいない台所

片っ端から戸棚を開け

味噌がない

何のことはない

食器入れの一番上から

知らんぶり顔で見下ろしている

馬鈴薯は生煮えで

玉葱の刻み方は大き過ぎて

まるで野菜の煮込みよろしく

汁の匂いは一人前で

確かに味噌汁ではあるが

馬鈴薯は生煮えで

玉葱と油揚げが蝙蝠の形に

鍋の表をこんもり覆っている

主のいない台所

炊飯器がぶつぶつ唸り出し

馬鈴薯の切り屑が

シンクにでかい堰をこしらえ

つけっぱなしのテレビに

大雨雷雨竜巻洪水注意報を

役所の公示まがいなきのうから

ずっと貼り付けている

無音

ヒトビトはたやすく
そいつを通過させてしまう

特急列車が街を縦横に走る
高架線や地下鉄から
いつの間にか這いずり出して
心臓病患者の多いビルの屋上にまで
よじのぼってくる

実際ヒトビトはそいつを拒む理由は
なに一つないのだし
そいつが目にも止まらぬ
速さで通り抜けるので
茶の間でお茶を楽しんでいる場合だって

まるで音もなく
あの枕木をガタピシ踏んずけて通る
威圧感もそれこそないのだが
軽くてかるすぎて
千枚通しのように
窓のガラスを突き抜けてしまう

お茶の中にそいつが
無色透明のハイセツブツや
やに下がるような口説を垂れ
振りまいて逃げていったことすら
知らないときがある

ことぐらゐ
簡単なことなので